

大し的あれんじ。

注意!!
この作品は
自身の中の
ハードルを
下げてから
お読みください

某日、都内某所に年金暮らしの老夫婦が住んでいました。

おじいさんは裏庭の家庭菜園へ、おばあさんは近所のコインランドリーに洗濯に行きました。

おばあさんがコインランドリーで洗濯をしていると、視界の端に大きな桃が見えました。

「おや、これはいいお土産になるわ。」

おばあさんは大きな桃を拾い上げました。

しかし、桃だと思っていたものはなんと元気な男の子だったのです。

おばあさんは、去年飼っていたシベリアンハスキーが死んで寂しかったので家に連れて帰りました。

家でおじいさんに話すと、

「これは神様が下さったに違いない！」

すでに成人した息子たちはめったに帰ってこないのです、おじいさんとおばあさんは大喜び。

すぐに市役所に行って養子縁組の手続きをしました。

コインランドリーで拾った男の子を、一回100円だったので百太郎と名付けました。

百太郎はスクスク育って、5年2組の人気者になりました。

そしてある日、クラスメートが6年生の吉田君たちにゲームソフトを取られたという話をしていました。

その話を耳にした百太郎は、

「ボクに任せてっ！」とゲームを取り返してくる約束をしました。

次の日曜日の朝、おばあさんからお弁当を受け取ると隣町の公園へ出かけました。

旅の途中で、親友のまさひろ君に会いました。

「百太郎、どこ行くの？」

「吉田君からゲームを取り返しに行くんだ。」

「それなら、お弁当のたまご焼きをくれたら、一緒に行つてあげるよ。」

まさひろ君はたまご焼きをもらい、一緒に行くことになりました。

そして、今度は悪友のようへー君に会いました。

「あれ？モモちゃんどこ行くの？」

「吉田君からゲームを取り返しに行くんだ。」

「なら、お弁当のから揚げをくれたら、一緒に行くよ。」

ようへー君はから揚げをほお張りながらついて来ました。

そして、今度はかなこちゃんに会いました。

「百太郎君、どこに行くの？」

「吉田君からゲームを取り返しに行くんだ。」

「それなら、わたしも一緒に行く」

なんと、かなこちゃんはお弁当を要求してきませんでした。

こうして、まさひろ君、ようへー君、かなこちゃんという仲間を手に入れた百太郎は、ついに隣町の公園にやってきました。

公園では、吉田君が取り上げたゲームを自慢している真っ最中でした。

「みんな、気をつけて。行くぞ！」

まさひろ君は吉田君のおしりに蹴りを、ようへー君はアックスボンバーを、かなこちゃんは髪

を引っ張りました。

そして、百太郎もバットを振り回して大暴れです。

とうとう吉田君が、

「まいったあ、助けてくれえ」

と、泣いてあやまりました。

百太郎たちは、吉田君から取り返したゲームを片手に、元気よく帰って行きました。

クラスメートは、ゲームソフトが返ってきて大喜び。

そして、みんなでゲームをして楽しく遊びましたとき。

めでたし。めでたし。

浦安次郎

つい2、3年前、釣り好きの浦安次郎という若者がいました。

ある日、次郎が釣りをしにやってくると、子供たちが小さなカメをいじめていました。

次郎は、かわいそうに思って、

「こらこら、カメをいじめたらかわいそうだよ。この魚をあげるからはなしてあげて。」

「この魚って、おっちゃん一匹も釣れてないじゃないかっ。」

「う、うるせいやい。キャッチ&リリースだよ。バカ野郎（泣）」

「うそだ〜。わたし見てたもん。おじさん一匹も釣ってないよ。」

いつの間にか、子供たちのいじめる対象が次郎に変わっていました。

すると次郎は、あらぶるニワトリのポーズで子供たちを威嚇し始めました。

「やべっ。このおじさん変な人だ。にげろ〜。」

「ふん、たわいもない。」

「さあ、もう大丈夫だよ。海に帰りな。」

次郎は今までの流れを無視してかっこつけました。

「え？あ、はい。・・・ありがとうございます。」

カメは、首をかしげながら海に帰って行きました。

一週間後、次郎が船で釣りをしていると、

「次郎さん、次郎さん。」と呼ぶ声がきこえました。

よく見ると、あの時の小さなカメが船のそばにいました。

「次郎さん、この間はどうも。一応お礼をしようと思ってきました。」

「お礼？いいよ、別に〜。」

「そうですか。せっかく竜宮にお連れしようと思ったのですが。」

「竜宮！マジで！いくいくう！」

「わあ！あ〜、ビックリした。行くんですか？」

「モチロンッ！」

「では、私を掴んでください。」

「えっ？掴むって？」

「はい、私は体が小さいですから。」

ガシッ

次郎はカメの体をしっかりと握りました。

「さあ、いきますよ次郎さん。」

「ちょっ！まっ！」ブクブク

「さあ、つきましたよ。次郎さん。」

「ハアハア。ハアハア。」

「どうしました。次郎さん？」

「どうしたもこうしたもあるかっ！おまえ、俺をこら」

「次郎さま、ようこそいらっしゃいました。どうぞお入りください。」

「カメっ！カメっ！今のだれっ！」

次郎は今までの怒りを忘れ、鼻息荒く聞きました。

「あれは竜宮のお姫様ですよ。」

「やっぱり～、姫って感じするもんな～。」

「次郎さ～ん。早くいかないと置いてきますよ～。」

「お、おう。」

次郎はあわててついて行きました。

次郎は広い部屋に案内されました。

広い部屋には、おいしそうなごちそうが並んでいました。

「うほっ！うまほ～。いっただっきま～す。」

次郎は品性のかげらもなく、ごちそうを食べ始めました。

「では、今から余興をお楽しみください。」

お姫様がそういうと、部屋の奥から魚たちが踊りながら出てきました。

「へっ？魚のダンス見ながら刺身食うの？ま、うまいからいっか。」

次郎は細かいことを気にしない男だった。

すっかり竜宮での生活を気に入ってしまった次郎は、時が立つのも忘れて、楽しく過ごしていました。

そして、3ヶ月が経ったある日、いい加減次郎が鬱陶しくなったお姫様は、

「ほらっ！これやるから早く帰れ。」と次郎に玉手箱をやりました。

「えっ？えっ？」

「さあ。いきますよ次郎さん。」

「あれ？この展開、もしかしてっ！ちょっ！まっ！」ブクブク

「一応言っとくが、玉手箱はあけるなよ～。」

お姫様の言葉は果たして次郎に聞こえていたのだろうか？

「ふう。やっと帰ったか。今回のヤツは長かったな。」

バシャーン！

「では、次郎さんお元気で。あでゅー」

カメは今までのキャラ設定を無視して帰って行きました。

「ハアハア。」

次郎は行きの時より肺活量があがっていたようで、すぐに息が整いました。

「ふうー。あれ？なんか違うね？」

次郎はあたりを見渡しながらかう言いました。

「ま、いっか。か～えろっと。」

次郎は細かいことを気にしない男だった。

次郎が部屋に着くとそこには、【山本】の表札がありました。

「あり？間違えたかな？えっと～、203。あってんじゃん。なんで？」

そこに大家さんが通りかかった。

「あ、大家さんちょうどいい所に。」

「あんれ？浦安さんだべか。3ヶ月も帰ってこないから次の人に入ってもらっちゃったよ。」

「ちょっと～それはなしでしょ～？」

「少しばかりかわいそうだけども、まあ、あきらめてけろ。」

次郎は住む所を失った。

あてもなく浜辺を歩く次郎。

ふと竜宮で貰った箱の存在を思い出した。

「あっ！そういえば、なんか箱貰ったっけ。開けてみよっ。」

お姫様の言葉は次郎に届いていなかった。

「何が入ってるのかな～。魚とかかな？」

ボワン

「ごほっ！げふお！けへ！」

「あん？ケムリ？ほかは？」

「何も入ってね～！！！」

「あのアマはめやがったな！」

バシャン！！

次郎は自分がおじいさんになっていることに気づかず海に飛び込んで行きました。

おしまい？